

第6回「現代と親鸞」公開シンポジウム

# 戦後歴史学と宗教研究

——教科書からこぼれおちたものを「民衆」・「宗教」からみる——

主催



真宗大谷派（東本願寺）  
親鸞仏教センター

## 安丸良夫の民衆史研究が問いかけるもの ：歴史研究と宗教史研究の対話のために

繁田 真爾

親鸞仏教センター嘱託研究員  
東北大学大学院国際文化研究科  
GSICSフェロー

1960年代半ばに台頭し、日本の歴史学に大きな影響を与えた民衆史研究。その代表的研究者のひとり安丸良夫（1934—2016）は、民衆宗教の研究を出発点として、生涯にわたり民衆の生活世界に焦点をあてた新しい歴史像の開拓をめざした。人間の生き方の凝集点として「宗教」を重視するその歴史研究は、どのような特徴があり、何を現代に問いかけているのだろうか。報告では、まず通俗道徳論やコスモロジー論、近代天皇制論など、安丸民衆史研究を特徴づける主要な議論＝方法論について確認する。その上で、近代史研究において「宗教」に注目することの意味や可能性を安丸がどのように語っているか、検討してみたい。

一方で戦後の近代史研究では、現在まで、宗教が主題化されにくい研究状況が続いてきた（近代宗教史は主として宗教学周辺の領域で研究が進められている）。だが近代社会のトータルな分析・理解のためには、歴史学が課題としてきた支配体制の問題も、宗教史研究が探究してきた宗教の問題も、いずれも重要な主題であることは間違いない。報告ではこうした問題意識を念頭に、安丸の民衆史研究にいま光を当てることで、歴史研究と宗教史研究の対話や架橋の可能性についても考えてみたい。

（しげた・しんじ）